

リレーエッセイ
海外派遣
専門家たよりかわむら みなと
川村 湊
文芸評論家

午後の デリー大学、 そぞろ歩き

インドで
日本近現代文学を講義する



デリー 大学は、オー
ルドデリーの

カシミール門から先の北の郊外にある。インドでもっとも広く、大きな大学で、全体で何人いるかと聞いたら、ある学生は30万人と答えた。聞き違いか、言い間違いではないかと思っただが、まあ、人口10億になんなんとするインドだから、それも有りかと思いい、真相の探索は止めにした。いわゆる大学町として広がり、どこからどこまでがキャン

パスか判然とせず、それに学生、教師、大学スタッフはもとより、行人、商人、屋台の物売り、自転車、人力車の車夫、ヒンドゥー教の祠の番人（えらい修行者なのかもしれない）、チャイ（茶）売り、レンガ積みの労働者、その家族、物乞いの人まで、広い意味でのデリー大学の構成員といえ、いえないこ

とはないのだから。

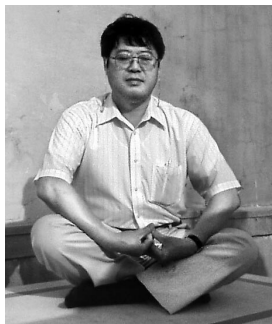
これに、野良犬の家族や、野良猫、そしてときどき紛れ込む野良牛までもいる。キャンパス内の一角にある、私が滞在しているインターナショナル・ゲストハウスには、ときどき、野生の猿が遊びに来て、窓をガタガタと鳴らせてうるさいし、朝は日本では見たことのない大小の野鳥の鳴き声で目を覚ます。リスが臆病そうに（忙しそうに）並木を登ったり降りたりしているのは、とりたてて誰の興味もひかない、当たり前前の風景だ。

私が

寄寓している人文
学部（ファカルテ

イー・オブ・ヒューマン・アーツの東アジア研究科（数年前までは、日本・中国研究科だったが、数年前に韓国語コースができて、現行の研究科となった）は、2フロック先の敷地にあるので、歩いていくと10分ぐらいかかる（ときどき人力車で行く。明治時代の帝大の教授様になったようだ。しかし、学生たちも相乗りで結構利用している）。遅刻に関しては、教師も学

生もそれほど気にすることはな
いようなので、授業開始時間
になってから部屋を出ても、教室
に着いたら、まだ誰もいないと
いうのはしょっちゅうだ。日本
から持ってきたパソコンで、そ
の日の分の教材を作っているう
ちに、「オハヨウゴザイマス」と
学生たちがやってくるのである。
と、私や学生たち（大
学院生である）が忘れていたと
思われたら心外だ。折れやすい
チョークで、書きにくい黒板に
私は、ワープロを使用するよう
になって以来ひどく低下してし
まった書字能力を呪いながら、
講義していることを板書するし、
学生たちもそれを一生懸命にノ
ートにとる。「僕たちは、パソ
コンで文章を書くなどという軟
弱なことはしません。ちゃんと
手で書きます」と、学生の一人
は力強く語ってくれたが、筆記
用具としてのノート・パソコンの
普及が後れていることも確かだ。
教師用のパソコンは、各研究室
にそなえつけられているのだが、
学生用の設備はいささか貧弱な



かわむら みなと●法政大学国際文
化学部教授。東亜大学(釜山)日語
日文学科講師、助教授を務め、
1985年帰国。法政大学助教授を経
て現職。著書に『ソウル都市物語』
『補陀落—観音信仰への旅』『アリ
ラン坂のシネマ通り』など

のである（I.T王国のインドの最
高学府としては、ということだが）。

教え

ているのは、もちろん日本文学で（私にはそれしか教えられるものがない）、近代文学史と現代文学を大学院の1年生と2年生に教えている。現代文学では、学生たちの希望で村上春樹の短篇小説を読んでいる。日本語学科の学生でも、現代小説を読むことは少なく、村上春樹や吉本ばなななどは、英語で読んだという学生はいても、原文で読んだものはない。一つには図書館にも本がないこと（このたび、『村上春樹全作品』が図書館に入った）、学校での日本文学の勉強が古典やせいぜい近代文学までに限られているからだ（という

より、現代ものは、「研究」の対象として認められていないようなのだ。

そういう意味でいえば、インドはまさに文献学的な「古典」文学の研究という、まさに正道的、正統的な学問的伝統が息づいている場所だ。人文学としての「文学研究」は、『ヤーマーヤナ』や『マハーバーラタ』などのサンスクリット文学の研究という脈々たる学問的系譜があるし、近代ではタゴールという国民的（民族的）詩人の存在が大きく、カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアリズム批評、サバルタン研究で有名なインド人学者は、みんなといったいほど外国居住（欧米ということだが）で、本国としての

しての軽蔑や無視にもつながるもので、日本文学（文化）研究において、アメリカやヨーロッパでは、マンガやアニメ、ミステリーやエンターテインメントの研究が欠かせない分野となっているのに比べ、それらに対する関心はとて薄いように思われる。

今回の、宮崎駿の『もののけ姫』や『風の谷のナウシカ』など、アニメデオをたくさん持つていったのだが、学生の反応が鈍いので、授業に使うのには二の足を踏んでしまった。アニメなんかよりも、志賀直哉や近松浄瑠璃や太宰治や森鷗外を勉強したいというのが、心強い言葉だとも思ったが、『パソコンは軟弱だ』という言葉

を聞いたときと同じように、少し複雑な気持ちになったことも否定できない。少々、クラシカルすぎるのではなかるうか、と。

のインドでは、もちろんそうした新しい文学研究の動向には敏感だが、文学研究の王道はやはり「古典研究」にあるという信念は揺らいでいないようだ。

これ

は逆にいうと、現代のもの、大衆的な文化や文化とされるものに対する

大学

内には、植物園やスポーツ・コンプレックスや広場や公園がある。散歩や散策にうってつけだ。難民のテント村のようなものもある。



り、子どもたちが遊んでいる。建設労働者のいわば飯場で、家族連れでキャンパス内に住みついているのだ。洗濯物が干してあり、母親らしい女性が水道栓の横で食器を洗っているかたわらで、小さな姉が幼い弟に、筵（むしろ）の上でんぐりがえりを教えている。こんな小さなうちからデリー大学に寄宿しているのだから、将来は大学者になるのではないか。孟母三遷の教えを思い出しながら、私は午後のデリー大学のキャンパスをそぞろ歩くのである。